

[掲載紙] 上毛新聞「点描ぐんま経済 日銀支店長 見聞録」

[掲載日] 2016年7月22日

[テーマ] 食材に恵まれた土地—採りたて野菜を自慢—

赴任してから1年余りが経過して、新たに転勤してきた方に対し少しだけ先輩面している自分に気付く。

先日群馬に赴任してきたばかりの知人から、地元の方に会うたび「何もなくてすみませんねえ」と言われるので、戸惑ってしまうと打ち明けられた。赴任してきたばかりで何も知らないところにそう言われてしまうと、返す言葉が思いつかないということであった。

私にも同様の経験はある。ただ、群馬には学生の頃から度々訪れていたもので、「何もなくて」と言われても、その都度「そんなことはありませんよ」と自信を持って答えてきた。そうすると、今度は「良い所でしょ」という言葉が返ってきて、本当は地元の方も「何もない」とは思っておらず、そう言ってこちらの反応を試しているだけであることが分かったりするのであった。

取りあえず、群馬初心者の知人には、まずは地の野菜を食べて、「何もない」と言われたら「群馬の野菜はとてもおいしい」と答えられるようにしておきなさいとアドバイスしておいた。歴史と伝統の重みとともにさまざまな産業を擁し、懐の深い経済を持つ地であること、四季折々豊かな自然に恵まれた地であること、そこに住む人は表裏がなく、魅力的な人ばかりであること、などを挙げるのはしばらくしてからで良いと。

というのも、自分がこちらでの生活を始めて以来、採りたて野菜のとりこになっているからである。東京にいる時には、野菜は肉や魚の付け合わせくらいにしか考えていなかった。今は「うちの畑に野菜を採りに来ませんか」と誘われれば、「物々交換」のための菓子折りを抱えて、離れた場所であっても出掛けていく。先日も藤岡で家族と共にジャガイモ掘りをさせていただいた。

支店長会議で上京した際にも野菜の話をしてきた。物流の発達によりどこでも新鮮な肉や魚が手に入るようになったが、いくら物流が発達しても、鮮度の高い、本当においしい野菜が手に入るのは産地だけである。したがって、群馬ほど食材に恵まれた土地はないと。

出身地を自慢する「お国自慢」ならぬ、転勤で赴任した土地を自慢する「赴任地自慢」である。東京で生活する同僚に対してはいつも「豊かな生活を送っていてすみませんねえ」と言っている。

日本銀行前橋支店長  
神山 一成